

旭川医大 病院ニュース

<http://www.asahikawa-med.ac.jp/>



編集 旭川医科大学病院
広報誌編集委員会委員長
谷野 美智枝

令和5年 新しい年を迎えて 年頭のご挨拶

病院長 古川 博之

皆様、新年あけましておめでとうございます。

令和5年の新年を迎えたわけですが、皆様の新年はいかがでしたでしょうか？

令和2年から3年目のコロナ禍の中で迎える新年です。おそらく誰もCOVID-19感染がこれほどまで長引くとは思っていなかったのではないのでしょうか？COVID-19に関しては、発生当時と比べ重症化率・死亡率は明らかに下がってきており、ワクチンの繰り返し接種やラゲブリオ、パキロビッドなど内服薬の出現も寄与したものと思われます。

一方、オミクロン株の感染力は強力で、第8波では、旭川市内でも急速にCOVID-19患者が増加し、当院も病床が逼迫、医療崩壊と言ってもいい危機的状態になった時期もありました。当院ではCOVID-19の流行が始まって以来、長期にわたってクラスターが発生していませんでしたが、昨年8月に1度目のクラスターを経験し、その後も合わせて4度のクラスターを経験することとなりました。他基幹病院や一般病院でもクラスターが発生したため、当院に救急患者が集中したり、COVID-19から回復した患者や一般の入院患者のための後方ベッドが確保できず、病床が滞って入院患者を受けることができなくなり、入院停止の指示を発出しなければならなくなる事態も発生しました。

元々、旭川市内において、当院はCOVID-19の重症例に対応すべく位置づけられていますが、現在、COVID-19患者のほとんどが軽症・中等症であることを考えると、ポストコロナを見据えて当院は、本来大学病院が行うべき、高度で専門性の高い医療を担うようにとシフトしていくべきと考えています。軽症・中等症については、他の基幹病院や一般病院にお任せして、本来あるべき大学病院の姿に立ち戻りたいものです。

今回、後方病院への転院が難しかった患者が多かったことを考えると、入院前あるいは入院時に早期回復を目指して積極的リハビリを行い、早期離床、そして、早期の自宅あるいは施設への退院を目指し、後方病院への転院を不要にする努力をする必要があります。もちろん、これからも後方病院の不足は本院の大きな課題であり、さらなる後方病院の確保、ネットワーク作りを進めていく努力も必要です。ここ数年行ってきた逆紹介の推進とかかりつけ医を持ってもらう働きかけにも通じるものがあると思っています。

医師の働き方改革についても2024年4月からの実施に備えて、今年中に準備を済ましておく必要があります。本院に勤務する医師の実態としましては、年間の時間外労働が960時間を超える医師が多数存在するため、連携B、B、C-1水準を申請する予定ですが、そのためには労働時間短縮計画についての審査が必要となります。また、少しでも超過勤務時間を短縮するためにタスクシフトやタスクシェアはもちろんです。宿日直が超過勤務に追加されないために兼業先の病院での宿日直許可が必須です。これらのことは皆様のご助力無しには達成できませんので、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

令和4年9月、特定行為看護師の研修修了者第1号が誕生しました。外科処置を専門とする看護師であり、今後の活躍が期待され、チーム医療を通じて医師の働き方改革にも貢献

してくれるものと期待しております。

当院の臨床における教授の多くが欠員であり、早急に選考を進めていく必要がありますが、その中でも昨年11月には、外科学講座（肝胆膵・移植外科学分野）の教授に横尾英樹先生が就任され、この1月には、小児科学講座の教授に高橋悟先生が就任、救急医学講座の教授に岡田基先生が就任されており、今年は、内科、麻酔科、眼科、耳鼻科等の教授選考が順次行われ、教授陣の充実が期待されます。

現在、当院はがんゲノム医療連携病院として、中核拠点病院である北海道大学の連携施設として位置づけられていますが、昨年11月にがんゲノム医療拠点病院と認定されるべく、申請を出したところです。今後は自らがエキスパートパネルを開催でき、道北道東の施設と連携できるようになりたいと考えています。

令和4年10月29日に札幌で臓器移植国民大会が開催され、旭川医科大学にこれまでの臓器移植の取り組みに対して感謝状が贈呈されました。これは、臓器提供及び移植実施体制検討委員会や院内コーディネーターの皆様への臓器提供の啓発に関する努力に対するものであり、これまでの尽力に感謝致します。

現在、病院執行部は、私病院長を筆頭に4名の副病院長：東信良（病院経営担当）、藤谷幹浩（事故防止、医療機器担当）、竹川政範（外来担当）、原口真紀子（安全問題、患者サービス、ボランティア担当）、3名の病院長補佐：田崎嘉一（医療従事者教育担当）、牧野雄一（臨床研修担当）、加藤育民（コロナ対策、臨床倫理担当）を中心として、計4つのWGが走っております。タスクフォースWG-1【地域連携・退院支援】（古川）、WG-2【外来運営】（竹川）、WG-4【医療機器の更新】（藤谷）、WG-6【ドクターズクラーク】（竹川）という内容で、いずれもこれからの病院の運営にとっては欠くことのできない課題の解決を目指しています。これに加えて、私自身もKPIを中心とした経営的視点から各科のヒアリングを行い、これまでの目標の達成度の確認とさらなる目標の設定を行い、皆さんとともに、さらなる向上を目指します。

病院の財政につきましては、昨年11月の財務の説明会にもありましたように、非常に悪化した状態にあることは明らかです。元々財政が逼迫していたところに、COVID-19流行に端を発するインフレと、ロシアのウクライナ侵攻によるエネルギー供給の悪化による光熱費の高騰でさらなる財政の悪化が進んできており、病院でも人件費や手当の削減は避けられない状態であることをご理解ください。

最後に、昨年までの職員の皆様の病院の発展に対するご尽力に感謝すると同時に、今年が皆様にとって、希望がかなう、すばらしい年になりますよう祈っております。





外科学講座 肝胆膵・移植外科学分野 教授就任にあたって

外科学講座 肝胆膵・移植外科学分野 教授 横尾 英樹

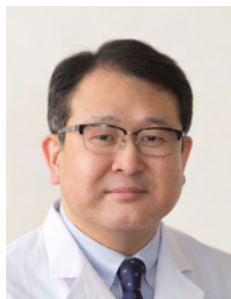
この度、令和4年11月1日付けで外科学講座 肝胆膵・移植外科学分野教授を拝命しました横尾英樹と申します。

1992年に北海道大学医学部を卒業し、北大第一外科に入局、関連病院、大学病院での研修を経た後に2002年に（旧）国立がんセンター研究所へ国内留学をいたしました。肝胆膵領域の臨床病理を学ぶ傍ら、当時としては最先端であったタンパク質を網羅的に調べることが出来るプロテオミクスに従事し、いくつかの分子に注目して研究を進めてきました。将来、外科切除と併せて治療可能となるように予後向上に努めて参ります。

臨床においては、技術的な面では低侵襲手術である肝臓、膵臓腹腔鏡手術の定型化に取り組みます。肝胆膵領域ではまだまだ一般化されておらず、部位によっては患者さんの死につながってしまう高難度手術でも

あります。肝臓の系統的切除、膵臓の膵体尾部切除への腹腔鏡手術の適応拡大、さらには将来的にバーチャル画像を駆使した初心者でも安全に行えるようなシステムの構築を目指していきたくと考えています。さらに昨今では肝胆膵領域で限られた施設でしか行われていないロボット手術の導入も行います。腫瘍学的な面にも力を入れていかなければなりません。高度進行肝細胞癌に対する薬物治療を取り入れた積極的な外科治療の実現、膵癌における全国規模での治験の参加、膵癌予防に対する食事開始時期のランダム化比較試験など多くのテーマに取り組んで参ります。

肝胆膵領域癌は高難度手術が多く敬遠されがちなどころもありますが、外科の力によって患者さんが元気に退院する姿を多く見せることで一人でも多くの人に当科を志す人が増えるように努力していく所存です。どうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



小児科学講座教授就任にあたって

小児科学講座 教授 高橋 悟

2023年1月1日付けで、小児科学講座の第5代教授を拝命しました。

私は、1990年3月に本学を卒業（12期）し、直ちに小児科学講座に入局しました。小児科学の基礎を学ぶ過程で、神経疾患の治療の困難さを痛感し、小児神経学を専攻することに決めました。1998年から2年間は国立精神神経センター神経研究所へ、2000年から5年間は米国国立衛生研究所（NIH）へ留学し、神経疾患の分子病態の研究に従事しました。帰国後、旭川厚生病院での勤務を経て、2006年4月より本学にて神経・筋疾患のお子さんの診療を中心に担当させて頂いております。

近年の小児医療を取り巻く環境では、3つの注目すべき変化があります。少子化と疾病構造の変化により、小中学校に在籍する児童生徒数は減少していますが、発達障害や

不登校状態にあるお子さんは増加の一途をたどっています。もう一つの変化は、遺伝子治療などの医療技術の進歩であり、難治性疾患でも根治を目指せる可能性が出てきました。私達は、このような変化への対応を求められており、小児科医の責任は重く、果たすべき役割も大きいと認識しております。

当科では、6つの専門グループに分かれて診療していますが、お互いが連携することにより、子どもの全ての疾患に専門的かつ総合的に対応できるチームを構成しています。日常診療では思いやりを大切に、困難に遭遇している子どもとご家族が光を見出すことができるよう力を尽くします。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。



救急医学講座教授就任にあたって

救急医学講座 教授 岡田 基

この度、令和5年1月1日付で旭川医科大学救急医学講座教授を拝命しました。私は旭川市出身で、平成4年に自治医科大学を卒業後、旭川医科大学第一内科に入局し、当時赴任したばかりの菊池健次郎教授のもと、内科診療技術を学びました。

義務年限終了後、基礎研究の機会をいただき、心血管系の酸化ストレスの研究を行いました。その後、開講して間もない救急医学講座・集中治療部に配属され、当時、素晴らしい心臓外科医でもあった初代郷一知教授のもと、救急・集中治療を学び、急性心不全の診療に携わってまいりました。2代目藤田智教授からは外傷診療や災害医療、蘇生医療を中心としたシミュレーションの世界を学ぶことができました。平成23年4月東日本大震災発災直後でしたが、米国シンシナティ大学への留学を

早く送り出していただき、多くの経験を積むことができました。多くの人とのご縁に恵まれ、帰国後は救急医療に専念することといたしました。

現代社会は医療技術の進歩による健康寿命の増加の一方で、独居高齢者が増加し、救急医療へのニーズや役割は変化してきています。私は「持続可能な地域救急医療体制の構築」をスローガンに救急医療を通して地域の診療を支えていくことにいたしました。

救急医療や集中治療はすべての診療科やコメディカルの協力があって成り立っています。また、行政機関を含めた多くの医療機関との連携をはじめ、当院は災害拠点病院としての役割も担っており、多くの皆様方からのご支援が必要となります。皆様方からの負託に応えるよう努力いたしますので、これからも救急医学講座・救急科へのご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

旭川工業高校の学生たちが イルミネーションを 取り付けてくれました!



昨年に引き続き旭川工業高校電気科の学生さんたちと道北電気工事業協同組合のみなさんが病院玄関前のロータリーにイルミネーションを取り付けてくれました! 冬は物寂しい季節ですが、そんな中、心が癒された方も多いのではないのでしょうか。



12月23日(金)、古川病院長と原口看護部長扮するサンタクロースとトナカイが、子どもたちにプレゼントを届けました。

子どもたちだけでなく、サンタもトナカイも病棟のスタッフも嬉しい、笑顔に包まれた時間になりました。



iPSから胎盤細胞 妊娠関連の病気理解へ一歩

京都大学医学研究科／小阪産病院 伊尾 紳吾



2022年10月、旭川医科大学同窓会医学奨励賞（学術奨励賞）を受賞いたしました。私たちの研究チームは、ヒトのiPS細胞（人工多能性幹細胞）を用いて胎盤のもとになる細胞を作ることにも初めて成功しました。

胎盤は、母親から胎児へ酸素や栄養を届ける役割を持ち、赤ちゃんの健やかな成長のために必要不可欠な臓器です。胎盤形成にまつわる異常は不妊や胎児の発育不全、母体の高血圧などの妊娠合併症につながりますが、詳しい仕組みは分かっていません。さまざまな組織に変化できるiPS細胞でも胎盤細胞を作成することは難しく、胎盤発生の仕組みを解明する上で課題となっていました。

山中伸弥教授が当初開発したiPS細胞（プライム型）ではなく、受精卵により近くなるように改良したiPS細胞（ナীব型）を使用しました。iPS細胞に与える栄養を工夫し、胎盤のもとになる「栄養外胚葉」を作製し、さらに、栄養外胚葉から3種類の胎盤細胞に変化させることができました。これらの細

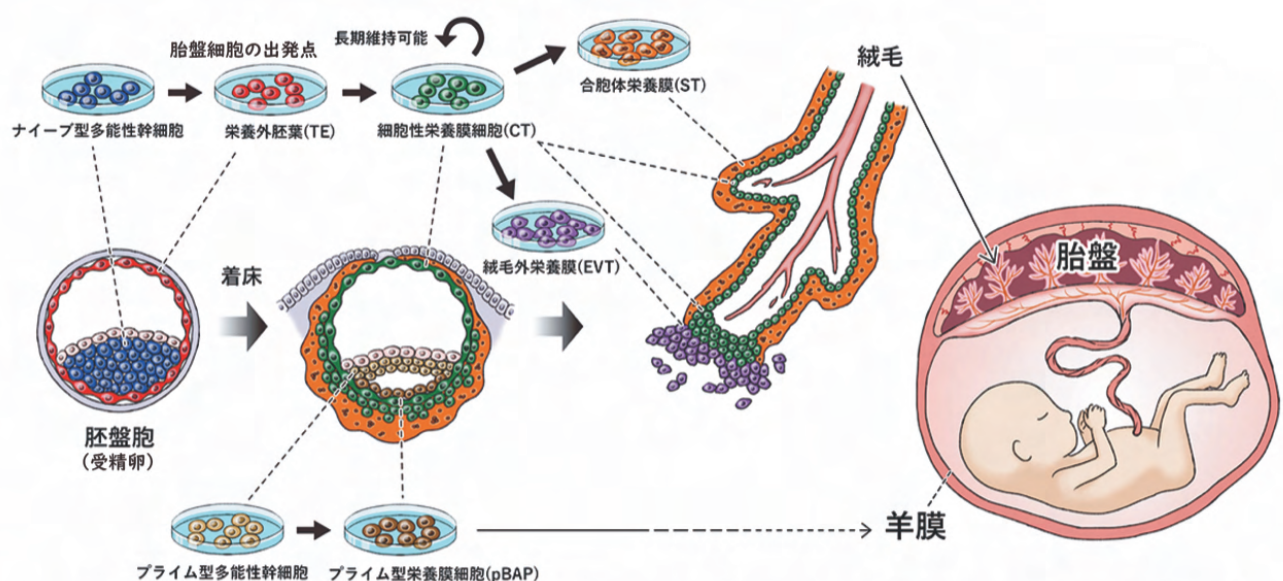
胞における遺伝子の働き方は生体の細胞のものと近く、胎盤細胞ができる過程を再現したことを証明しました。

今回の成果は病気の成り立ちを細胞レベルで調べる手法に道をつけるもので、胎盤に起因する病気の治療に役立つことを期待しています。また、胎盤になる細胞を胎児になる細胞と組み合わせて受精卵のような形を作り、子宮の組織と反応させることで、発生初期を再現できる可能性もあります。研究成果は米国科学誌「セル・ステム・セル」に掲載されています。

患者さんの皮膚や血液など、患者さん由来の細胞から作るiPS細胞を疾患iPS細胞と呼びます。このiPS細胞を用いてパーキンソン病やアルツハイマー病の研究分野では、病気の仕組みが明らかになり、新しい治療薬の開発につながる成果が発表され始めています。胎盤に起因する病気についても、疾患iPS細胞を活用することで、病気の原因究明、治療薬の開発を進めていきたいです。

今後も、旭川医科大学の卒業生としての誇りを持ち、研究や産科診療に貢献できるよう精進してまいります。

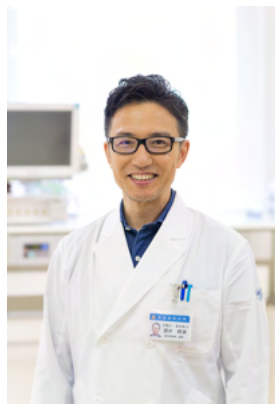
セル・ステム・セル掲載ページ <https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/33831365/>



ナীব型 iPS 細胞を用いた胎盤細胞ができる過程の再現

集中治療医のアタマの中の引き出し

自治医科大学附属さいたま医療センター 讃井 将満



旭川医科大学第15期生の讃井 将満（さぬい まさみつ）と申します。現在、埼玉県さいたま市にある自治医科大学附属さいたま医療センターに勤務しております。もともとは手術室で働く麻酔科医でしたが、現在は集中治療室（ICU：アイシーユー）で

“集中治療医”として働いています。集中治療医とは、ICUで重症患者を専門的に診療する医師です。人工呼吸やECMO（心肺機能を補助する装置：エクモ）治療の専門家です。

ICUでは、夜中にしばしば患者さんが急変します。我々集中治療医は、患者さんの意識がなくなったり、息が止まったり、血圧が下がったりしても、慌てずに対応できます。アタマの中に“引き出し”があって、必要な医学知識がすぐに取り出せる状態で収められているからです。ただ15年以上ICUで働いてきた私でも、なかなか引き出しが開かないことがあります。

例えば当直中の深夜2時、仮眠中にPHSの呼び出し音が鳴り「〇〇さんの酸素飽和度が急に下がりました」と起こされた場合です。「すぐ行きます」と返事をして、病室に駆けつけた方がいいが、急激に悪化する患者さんを目の前に、寝ぼけアタマの引き出しがなかなか開かない場合があるのです。

もちろんその間、患者さんは待ってくれません。アタマというよりカラダが覚えている治療（例えば、酸素吸入）を指示しつつ、「なぜ悪化したのか」を考えます。悪化の根本原因を捕まえないと救げられないからです（心筋梗塞は酸素吸入だけでは治りません）。そんなとき、ナースが発する「先生、心電図検査しますか」という一言が鍵となり、引き出しが開いて原因追求に役立つ知識が次々に浮かんでくることがあります。

深夜2時自宅で熟睡中、当直中の若いレジデントから電話で相談を受ける場合もあります。ICUには多数の患者さんが入室しており、即座にどの患者さんなのかイメージが浮かばず、適切な指示が出せない場合があります。そんな時には、レジデントへの質問（例えば、ICUに入室した理由、既往歴、意識、血圧、呼吸数など）が効果的です。徐々に患者さんのイメージが明瞭になり、適切な指示が出せるようになります。レジデントが提供してくれる情報が、引き出しを開ける鍵となるのです。

2022年10月、およそ30年ぶりに大学を訪問しました。当然、夜にはサンロク街で旧友と語らう会食が開かれるわけですが、昔話の合間に、お互いの職場の現状、困っている問題を交換するタイミングがやってきます。幸運なことに、今回、私は旧友から自分の引き出しを開ける鍵をもらうことができました。果たして、私が旧友に鍵を渡せたかわかりませんが、「ナースの言うことだから、レジデントの言うことだから、部外者だから」とたかをくくっていると、なかなか引き出しは開かないでしょう。一旦引き出しが開けば、第三者の、耳が痛い、鋭い指摘ほど、効果が高いのも事実です。

遠いさいたまのICUで、引き続き、同僚の、そして患者さんの声に、虚心坦懐に耳を傾けていきたいと思います。

編集委員会注： 讃井 将満先生は、2022年度に第21回旭川医科大学同窓会医学奨励賞（特別奨励賞）を受賞されました。

看護師特定行為研修1期生の修了と2期生の研修開始について

看護師特定行為研修担当 大宮 剛

2022年9月30日、当院看護師特定行為研修において最初の修了者が誕生しました。また、11月30日には、修了式を行い古川病院長から「急性期から在宅医療を見据え、チーム医療を推進していく特定行為看護師への期待」へのメッセージと共に修了証が授与されました。1年間の研修では、仕事と両立しながら学ぶ大変さやコロナ禍の影響から該当の症例がなく、実習が進まない状況もありましたが、研修が進む中で、今後の活動のイメージやケア向上への期待につながっていました。研修生の努力と研修を担当していただいた指導医の方々、携わっていただいた皆様のご支援で修了することができました。ありがとうございました。

10月1日からは新たに4名が2期生として研修を開始しています。4名での研修は、ディスカッションが活発に行われ、困ったことは相談し合い、切磋琢磨しながら研修が進んでいくと感じています。今後もご協力をよろしくお願い致します。



ビジネススキルを学ぶ医療職・事務職合同研修会の開催について

病院庶務係 橋村 俊大

このたび2022年9月21日及び10月4日に医療職・事務職合同のビジネススキルを学ぶ研修会を開催しました！この研修会は、医療職の方々と職員の育成について意見を交わす中で、ビジネススキルを医療職と事務職で一緒に学ぶ機会を作ることができれば面白いのではないかと考え提案しました。

研修の内容

今回の研修は「打合せのスキルを学ぶ」と題して開催しました。みなさんは打合せは得意でしょうか？普段何となく行っている「打合せ」にはビジネスパーソンとして必要なスキルがたくさん詰まっており、それを言語化して身に付けることで今までよりも少し“打合せがうまくいく”ことを目的に開催しました。

研修会を終えて

今回の研修会には医療職・事務職延べ38名に参加をいただきました。実施後アンケートの結果は概ね好評で「打合せの方法を学べる研修はあまり無いため、貴重な経験になった。」「ロールプレイを行うことで新たな気付きがあった。」などの感想があり、また医療職・事務職問わず「他職種との交流が良い機会となった。」という意見が多くありました。今回のような多職種合同の研修会は、今後も継続的に開催していきたいと考えています。



高齢者虐待対応研修会のご報告

高齢者及び障がい者虐待対応委員会 松尾 昂

10月24日、第1回高齢者虐待対応研修会を開催しました。高齢者及び障がい者虐待対応委員会は令和3年4月に設置された新しい委員会です。

最初に高齢者虐待対応チームメンバー(Abuse対応チーム)であるMSW松尾から「当院の高齢者虐待対応の流れ」と題し、当院の高齢者虐待対応マニュアルの紹介を行いました。続いて、旭川市役所高齢者支援係長平島氏より「市役所の使い方～高齢者虐待の対応において～」と題して事例を交えて市の虐待対応についてご講演いただきました。

本研修会は、会場(委員会メンバー)とZoomによるハイブ

リット開催とし、42名の方にご参加いただきました。研修後、参加者から「医大病院での事例なども共有できたらよいと思った」「介護力不足と虐待の境目が難しいと感じたので今後も研修会で事例提供してほしい」など多くのご感想とともに研修会の継続を期待するご意見も頂戴しております。

委員会としては、今後も年1回程度で研修会開催を予定しております。患者さんの虐待を見逃さないよう、職員皆様のご協力を賜りながら活動していきたいと考えておりますので今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

薬剤部

新薬紹介(83)

アンデキサネット アルファ(遺伝子組換え)(オンデキサ®静注用)

薬品情報室

猪俣 茉耶

アンデキサネット アルファ(遺伝子組換え)(商品名: オンデキサ®静注用)は、昨年5月に発売された本邦初の直接作用型第Xa因子阻害剤(以下FXa阻害剤)中和剤である。規格は200mgバイアルのみで、当院では昨年10月より通常採用となっている。

効能・効果は、FXa阻害剤(アピキサバン、リバーロキサバン、エドキサバン)投与中の患者における、生命を脅かす出血または止血困難な出血の発現時の抗凝固作用の中和である。直接トロンビン阻害剤であるダビガトランの中和剤イダルシズマブ(商品名: プリズバインド®静注液)とは異なり、重大な出血が予想される手術や処置への適応はない。

用法・用量はA法とB法の2つがあり、FXa阻害剤の種類、最終投与時の1回投与量、最終投与からの経過時間に

応じて決まる。いずれの場合も、まず一定量を30mg/分の速度で残量を2時間かけて静脈内投与する。A法では5バイアル、B法では9バイアルが使用される。

重要な基本的注意として、止血後は基礎疾患による血栓塞栓症のリスクを低減するため、抗凝固療法再開の有益性と再出血のリスクを評価した上で、できる限り速やかで適切な抗凝固療法再開を考慮することが求められる。重大な副作用は血栓塞栓症およびinfusion reactionである。

保険請求上の注意として、本剤の投与が必要と判断した理由等を診療報酬の摘要欄に記載する必要がある。希少疾病用医薬品に指定されており、薬価は1バイアルあたり33万8671円と高額である。前述した効能・効果も十分に理解の上、適正な使用に留意されたい。

臨床検査
輸血部発

11月11日は臨床検査の日

臨床検査・輸血部

吉野 寛隆

毎年11月11日は、「臨床検査の日」です。臨床検査が病気の早期発見や早期治療につながる有用なものであることを広く知ってもらうため制定されました。

臨床検査・輸血部では、毎年「臨床検査の日」に合わせて企画を行っております。今年度は、正面玄関ホールにポスターとデジタルサイネージの掲示を行いました。ご覧になった方もいるかと思います。今回の掲示では、当部で取得している国際規格のISO15189や、新型コロナウイルスの検査について重点的に紹介しました。

ISO15189は、臨床検査室の技術能力を証明する国際規格です。臨床検査・輸血部は一昨年、日本適合性認定協会による厳しい審査を受け、この認定を取得しました。これは、当院で得られた検査結果が正確で、国際的に通用するデータであることを保証するものです。このような内容についてポスターで紹介しました。

また、当院では、新型コロナウイルスの検査を抗原検査とPCR検査の2種類行っています。抗原検査は手技が簡便で短時間に結果が判明する、迅速性の高い検査です。一方、PCR検査は結果が出るのに時間がかかりますが、抗原検査に比べて高感度にウイルスを検出することができます。ポスターでは、図などを用いてこれら2種類の検査の原理や違いについて紹介しました。

臨床検査は、健康状態の把握のみならず、疾患の診断や治療方針の選択、治療効果の判定など多くの場面において必要不可欠なものです。今後もこのような機会を通じ、臨床検査について周知していけたらと考えております。来年度も、11月11日の前後の週で掲示を行う予定です。宜しくお願い致します。



永年勤続者表彰

勤労感謝の日にあわせ、11月21日（月）午後2時00分より、令和4年度永年勤続者表彰式が第一会議室で行われました。

表彰式は役員及び所属長の列席のもと、学長から被表彰者に対し表彰状の授与並びに記念品の贈呈が行われました。



次いで、学長から永年にわたり本学の発展・充実に尽力されたことに対する感謝とねぎらいの挨拶がございました。なお、被表彰者は次の方々です。（敬称略）

本間大	（副学長、国際医療支援センター 教授）	松下晴美	（事務局人事課人事第一係 係長）
三好暢博	（図書館長、一般教育（英語） 教授）	梶修人	（事務局会計課調達係 係長）
加藤育民	（産婦人科学講座 教授）	山口俊太郎	（事務局学生支援課教務係 係長）
片山英人	（産婦人科学講座 准教授）	七戸寛敏	（事務局医療支援課医療安全係 係長）
日下部博一	（一般教育（生物学） 准教授）	丸田一貴	（事務局経営企画課経営戦略担当 専門職員）
一條明美	（看護学講座 准教授）	渡辺麗美	（栄養管理部 栄養士）
中島香織	（放射線科 講師）	工藤紘子	（外来ナース・ステーション 副看護師長）
丹代晋	（整形外科 講師）	上野直美	（看護部（皮膚・排泄ケア専従） 副看護師長）
赤坂和美	（臨床検査・輸血部 講師）	佐々木美穂	（7階西ナース・ステーション 副看護師長）
渡邊啓子	（事務局総務課 課長補佐）	末武美穂	（外来ナース・ステーション 看護師）
石井仁	（事務局人事課 課長補佐）	加藤千晴	（看護部地域医療連携室 看護師）
庄山栄一	（事務局入試課 課長補佐）		

2022年度 患者数等統計

（経営企画課）

区分	外来患者 延数	一日平均 外来患者数	院外 処方箋 発行率	初診 患者数	紹介率	入院患者 延数	一日平均 入院患者数	稼働率	前年度 稼働率	平均在院 日数 （一般病床）
7月	人 31,136	人 1,556.8	% 97.1	人 1,201	% 95.3	人 14,885	人 480.2	% 79.8	% 75.4	日 10.8
8月	32,571	1,480.5	97.4	1,308	87.2	13,883	447.8	74.4	76.3	10.4
9月	31,242	1,562.1	97.5	1,053	95.6	13,433	447.8	74.4	78.6	10.5
計	94,949	1,531.4	97.3	3,562	92.4	42,201	458.7	76.2	76.8	10.6
累計	187,112	1,521.2	97.4	7,186	92.1	84,972	464.3	77.1	75.7	10.5

時事ニュース

- ◆12月1日(木)～1月3日(火)第21回 各部門における安全への取り組み報告会
- ◆12月5日(月)～16日(金)職員定期健康診断※土日除く
- ◆1月27日(金)精神科病院実地審査・指導
- ◆2月26日(日)緩和ケア研修会



編集後記

新年あけましておめでとうございます。今年の干支「癸卯」は、停滞していた世の中に希望の芽吹きを促す年ととらえることができるようです。新型コロナに対する治療薬が認可され収束の兆しも見えてきた今年は、まさにそのような年になりそうです。これから世の中は徐々にコロナ禍前の状況に戻っていくことが期待されます。コロナ禍での生活でついた新しい習慣はすぐに古い習慣に戻るとは限りませんが、今まさに悪しき習慣とは縁を切り良い習慣を取り入れる絶好の機会です。2022サッカーワールドカップ日本代表監督の「過去は変えられないが、未来は変えられる。」という言葉は全てのことに通じる名言だと思います。「もう年だから」とはじめてから行動に出ることを躊躇する方もいると思います。でも、良いと思えることは思い立った日から積極的に取り入れていこうではありませんか。これからの人生、今日が一番若いのですから。

（医工連携総研講座 石子智士）